



〒514-0003

津市桜橋 2 丁目 142

三重県公立小中学校教頭会

教育文化会館別館 3 階

TEL 059(228)2340

FAX 059(228)2271

E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp



一年を振り返って

三重県公立小中学校教頭会会長

辻 幸子

一年間会長職に就かせていただき、非常に感謝致しております。教頭職は長く努めておりますが、県の役員は初めてであることから、わからないことも多く、他の役員の方々や理事の皆さんなど多くの方に支えられ、微力ではございましたが、おかげ様でこの一年間任務を果たすことができました。ありがとうございました。

少し雑感となりますが、昨年日本で 3 名の方にノーベル物理学賞が贈られました。青色LED は私たちの生活をより豊かにしてくれる大発明です。科学者の方々の大きな野望と挑戦の中で毎年のようにノーベル賞科学分野で受賞者がみえるということは、日本人の誇りであると思います。科学の進歩はめまぐるしく私たちの予想を遙かに超えたところまで進歩し続けるのだらうと感じます。一方では、今でもなくなるしない「戦争」や「テロ」が勃発しています。戦争によって破壊された街、尊い命を奪われたり、傷つけられたり飢餓や伝染病などの二次的惨事に苦しんでいる人々を思うと心が締め付けられ胸が痛みます。そんな中で 17 歳という若さでノーベル平和賞を受賞された「マララ」さんの理念・

行動・勇気に大きな感動を覚えました。そして教育者として平和の大切さを訴え続けると同時に「質の高い教育を全ての子どもたちに平等に提供する」ことの責務を強く感じたのです。さらに教頭として先見性と深い洞察力により、子どもたちが輝かしい未来を築き上げていくために育成しなければいけない真の力を見極め、教育活動を粒粒辛苦のごとく地道に展開し、子どもたちの笑顔が絶えない魅力ある学校づくりにしていかなければいけないと思います。

さて、本年度の役員会は、穏やかな雰囲気の中にも三重県教頭会の様々な事業に関して前向きな白熱した議論が交わされました。

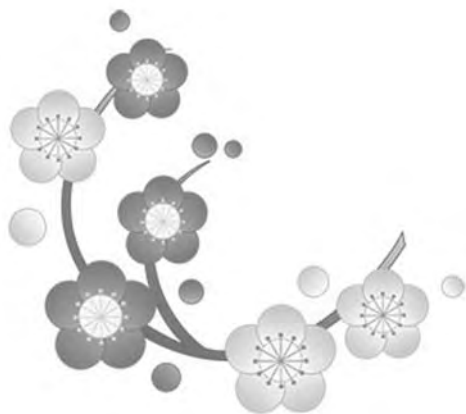
理事会では、教育課題をテーマに地域を越えて、グループごとに現状を話しながら交流を進めてきました。話し合うことで地域差や教頭の置かれている共通の課題が見えてきました。その課題の一つが「土曜授業」「業務改善」でした。8 月の夏季学習会では初任の教頭先生だけでなく、希望者にまで参加を求めたり、1 月には理事さんと各地区の会長さんに集まっていたき、「新たな人事評価制度の導入」と「学力

向上への取組」という内容で三重県教育委員会の方を講師として説明会を行いました。このような研修会を持ち、見識を深めることは重要であることを再認識し、有意義な学習会となりました。

来年度も土曜授業やみえスタディチェックの実施、学力向上対策チームによる学校訪問等、学力向上に向けた不易の取組を尚一層充実させることが必要となります。他にも教育課題は山積している現状の中、平成28年度実施に向けた人事評価制度の試行が来年度から始まり、教頭職はますます多忙を極めることとなります。10月の要請活動で、多忙を極める教頭職について教頭アンケートから得た結果をもとに、教育委員会を始め、様々な機関から提出を迫られる調査の整理改善を強く要望しました。また、大規模校への複数教頭配置を強く要望したところ、主幹教諭・指導教諭といった新しい職種の配置

といった形で回答を得ました。来年度は主幹教諭が15校程度、指導教諭が35校程度配置予定です。ただ、まだまだ教頭職の業務は改善されておらず、今後の大きな課題です。全国公立学校教頭・副校長会理事会でも、業務改善が重要課題であることが話され、新聞など情報メディアからも注目されている内容であることが述べられていました。

最後に、会員の皆様には県教頭会の活動にご理解とご協力をいただき本当にありがとうございました。また、私はこの一年間で様々な方と出会い、新しい経験の機会を得て、本当に幸せでした。新しい出会いや出来事は全てに於いて意味のあるものでした。今後、三重県教頭会の「絆」と「出会い」がさらに高まり、組織が尚一層強化発展することを願いつつ、皆様の益々のご活躍とご健康をお祈り申し上げあいさつとさせていただきます。



第42回 東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会 (福井大会)

第1分科会

「教育課程に関する課題」

四日市市立塩浜中学校 原 雅 樹

平成26年10月23、24日、福井市で開催された「第42回東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会」に参加しました。1日目は全体会で、開会行事に続き、永平寺 布教部部長である渡邊宣昭老師による記念講演がありました。2日目は4つの会場に分け、6つの分科会が行われました。

私は第1分科会「教育課程に関する課題」に参加しました。この分科会では、①幼保小中連携でめざす家庭教育力・学校力の向上（富士宮市公立小中学校教頭会）と②「特色ある学校づくり」をめざして（越前市小中学校教頭会）の2つの提言がなされました。

提言①では、昨年度の全国・学力学習状況調

査の結果から、児童生徒が「ゲームをする時間が長い」という実態を受け、全市内小中学校で「ノーテレビ・ノーゲームデー」の取組を通して、家庭教育力と学校力の向上につなげていくという富士宮市公立小中学校教頭会の提案がなされました。

提言①発表後のグループ別討議では「家庭教育力や学校力が向上するための取組と教頭の関わり」という視点で話し合いました。「生活改善は、自分の力で見直していかないと実現しない。」「幼保小中が、その校区の実態に合わせて教育課程（保育）の中に位置付けて取り組まないと成果は期待できない。」「教員も保護者も学びの場の充実を願っており、教頭はその両者の思いを結び付け、適切に働きかける力が必要である。」「教頭は、既存の組織や取組と関連付けを図るとともに、外部の組織や地域への働きかけをすることが重要である。」などの意見と具体的実践例が出されました。

提言②では、市の教育振興ビジョンの一環として、「特色ある学校づくり」研究事業を実施している中で、PDCAによる改善を図りながら、コーディネーターとしての教頭がこの研究事業に、どう関わり、いかに発展させようとしているかという越前市小中学校教頭会の提案がなされました。



提言②発表後のグループ別討議では「『特色ある学校づくり』を進める上での課題と、それに対する改善に向けて教頭としてどのようにマネジメントしていくか」という視点で話し合いました。「特色ある学校づくり事業に先立ち、その趣旨を丁寧に説明し、各学年に応じて取組のねらいを明確にすることが大切である。」「教頭はそれぞれの活動の様子を把握し、教職員・児童生徒の活動支援を適宜行うことが必要である。」「事後の感想やアンケートから、次の取組への改善策を明らかにすることが重要である。」「一人の百歩より百人の一步。事後は教職員で話し合い、活動の振り返りを行い、一人ひとりの意識の向上を図ることが、教頭の働きかけのポイントである。」などの意見が出されました。

グループ別討議では、各市町村、各学校の教育環境、学校規模の違いにより、具体的な取組内容は異なる場合がありますが、そのアプローチは違っても、実態を十分に把握した上で、そ



の都度、結果を検証し、見直し改善を図ることを継続していかなければいけないという点は共通しているということを、あらためて実感することができました。

第2分科会

「子どもの発達に関する課題」

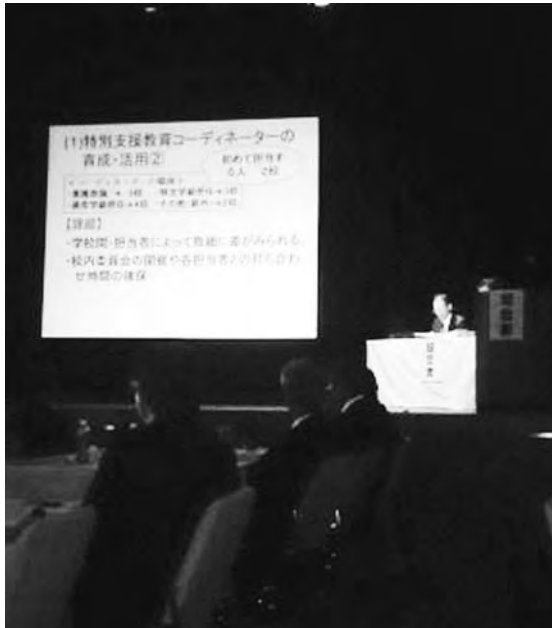
津市立村主小学校 奥村 泰久

「子どもの発達に関する課題」を研究課題に挙げた第2分科会に参加させていただいた。

1 番目の提言では、「通常学級における"気になる子の支援のあり方"と教頭の役割について」というテーマで、石川県鳳珠郡小中学校教頭会として、石川県能登町立小木小学校の多賀忠雄教頭先生の報告があった。鳳珠郡教頭会の研修の中で確認された、本提言に係る教頭の役割としては、(1) 支援体制、協力体制を支える環境づくり・人づくりとして、①特別支援教育コーディネーターの育成と機能化、②校内の共通理

解の徹底と支援体制づくり、③ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践の推進、④関係機関の専門相談員の招聘や定例化した校内委員会の推進が挙げられ、また、(2) 小中連携のための連絡調整と支援の確立として、①小中連携に対する全職員の意識の向上、②小中合同の支援委員会の設置や9年間を見通した継続的な支援体制づくり、③小中の「指導の接続」と「指導体制の接続」が挙げられた。

2 番目の提言は、「保幼小・小中の円滑な接続の在り方を求めて 一校種間連携の取り組み



の質を高める教頭の働きかけー」をテーマに、福井県坂井市小中学校教頭会として、福井県坂井市立高椋小学校の平井俊行教頭先生の報告であった。坂井市教頭会では、5歳児保護者、小6・中1の児童生徒、小1・中1の担任へのアンケート調査を行い取り組みの有効性や改善策を検討されたそう。その中で実践してきた教頭の働きかけとして、保幼小連絡協議会の際に、①子どもの様子を率直に伝える場を設け、園に協力を求める。②協議会や交流活動の連絡調整を行う。③日常的な情報交流を行う。④保護者に役立つ情報提供や保護者のグループ相談会を検討する。また、小中連携連絡協議会に関わっては、①各部会での協議にアンケート調査結果を活用する。②教頭会で検討した改善策を部会

で紹介する。③各部会での取り組みの改善を促す。

提言後のグループ討議の中では、提言1の後でも提言2の後でも、小中をどう繋ぐか、小中連携をどのように進めているかということが話し合いの中心になった。その中で話し合われた教頭の役割としては、質や条件の異なる学校同士を円滑に繋ぐための連絡調整と結果を検証していくPDCAサイクルの確立に向けての推進役を果たすことにまとめられた。

今回、東海北陸地区他県の教頭先生方と意見交換することで、三重県とは異なる教頭の実態を直接聞くとともに、状況は違えども根本で抱える悩みは共通することを知り得たことは収穫であった。



第3分科会

「教育環境整備に関する課題」

松阪市立飯高西中学校 井戸坂 幸 男

東海北陸大会2日目の3分科会では、三重県と福井県からの提言をもとにグループ討議が行

われた。

提言1は、津市立一身田中学校の「地域の教



育力を活かした特色ある学校づくり」が報告された。学校支援ボランティアによる授業支援/放課後の学習支援/部活動での支援/環境整備/本の読み聞かせ、三重大学の学生ボランティアによる授業アシスタント、大学教授・院生による研究授業/最新の教具を使った授業が紹介された。これらの活動の成果として、子どもたちの学習効果、図書館活動の活性化、子どもの地域を考えるきっかけ、ボランティアの方の生きがいなどがあり、逆に、ボランティアの人材確保、連絡調整のための時間確保、活動のための予算確保などが課題として報告された。続いて、学校支援地域本部「サポーターいっちょ」の取り組みが紹介された。具体的な支援事業として、キャリア教育支援事業（企業教育の支援他）、生徒会活動支援事業（町屋海岸清掃活動他）、学習環境整備事業（砲丸サークル製作他）、購買事業（飲料用自動販売機の設置・管理他）が紹介された。これらの活動を支えるために、教頭は、サポーターと保護者、地域、教職員をつなぐ役割を果たしている。この提案をもとに「地域との連携において教頭の果たすべき役割」について、グループ討議を行った。

提言2は、福井県大飯郡の高浜町立内浦中学

校の「学校・家庭・地域社会の連携に基づいた特色ある学校づくりと教頭の役割」が報告された。家庭・地域との連携による子どもの育成として、早寝とアウトメディアへの取り組みとして、家庭と協力した児童の生活習慣の取り組み、地区懇談会における話し合い、夏季休業中における健康カレンダー、講演会の開催が紹介された。学校、家庭、地域が連携して、社会のルールを身につける取り組みとして、「青郷ルール」の作成、地域への啓発が報告された。「青郷ルール」とは、言われたことはすぐやろう/約束を守ろう/困っている人を助けよう/責任を持とう/「ごめんなさい」を言おう/「ありがとう」を言おう/人にいじわるをしない/人の悪口はやめよう/自分からあいさつをしよう/の9項目である。更に、校内掲示板でボランティアを募る「ハローボランティア」や地域の先生を招いての自然体験活動、地域の魅力をアピールする総合の時間の取り組み、産学連携事業とPTA活動がタイアップしたエネルギー環境実験の親子講座も紹介された。この提案を受けて、「学校と家庭・地域との連携を深めるための教頭としての関わり方」について、グループ討議を行った。

そして、最後に助言者から、「教頭がすべきこと」として、次の5つの提言があった。

1. 教育者としての使命と責任感を持って関わること。
2. 教育目標の実現に向け、具体的な計画を立て、遂行すること。
3. 人・物・金・情報・ネットワーク等の資源面で、パイプ役・牽引役・調整役になること。
4. 「役職が人を育てる」という言葉のように、校内の校務分掌において適切な助言をする。
5. コーディネーターとして外部連絡調整を綿密に行い、学校から正確な情報を発信し、また、外部と積極的な情報交換をしていくこと。

第4分科会

「組織・運営に関する課題」

亀山市立亀山東小学校 高 嶋 浩 史

ホテルフジタ福井で行われた、第4分科会「組織・運営に関する課題」に参加した。富山県射水市（提言1）と福井県勝山市（提言2）からの提言を受け、話し合った。

射水市の提言1は、「中学校区を活用した児童生徒の健全育成のための組織と運営」であった。新たに組織を立ち上げるのではなく、既存の組織を活かして取り組みを展開していき、そこに教頭がコーディネーターとして参画し、活動の立案や関係者との連絡調整、協力体制の構築などの働きかけをしている内容であった。

生徒指導、ボランティア、学力向上の3本柱で、これらを有機的に絡めながら中学校区の連携をこの一つの組織に集約して行っていることが特徴的であった。また、保・幼・小・中、地域がこの組織に集約して事業を展開したり、また、この協議会で話し合われたことをそれぞれの学校・園・地域の活動に反映させたりすることで、児童生徒の健全育成につながっていくというものであった。

後の話し合いで、他地域では、ともするとこれらはあまり関連付けられずに、別々の組織でそれぞれの主任や係が中心になって進めていることが多い。中学校区の「健全育成連絡協議会」に集約し、各校での教育活動や研修等を有機的に関連付け、実効性のある連携がなされていたことに、各参加者からの評価や意見が集まった。勝山市の提言2は、「通うのが楽しくなる学校づくりを目指して～勝山笑顔プログラムの推進を通して～」という題で、まず教職員一人ひと

りが達成感ややりがいを感じ、「通うのが楽しくなる学校」づくりを推進していく事を理念に、全市的な取組・運動を展開していることの内容であった。

まず、多忙化解消調査を実施し、その調査結果をもとに、各校が共通で行えるプログラムを「勝山笑顔プログラム」として提案し、各学期・年度毎に意識調査を行い、結果分析し、プログラムを段階的に修正・実践していた。教頭として、行動目標の共有化やキャリア形成の支援を行うと共に、NET利用の促進やインフォーマルな話し合いの場を設定する事で、この取組が実効性のあるものになるよう働きかけていた。

後の話し合いでは、NET利用については、ほとんどの地域で積極的に推進されているが、それが必ずしも業務の効率化や充実に繋がっていないのではとの意見も出されたが、効果が出るような工夫をしていこうという方向で意見交換した。また、NETの掲示板利用や校務サーバーの利用等で、打合せの簡素化やペーパーレスの職員会議や研修会などに取り組んでいる地域があり、それなりの成果を上げていることやその課題について情報交換した。また、管理職としてミドルリーダーを育成することの必要性や、職員の充実感や達成感を高めるためにも、教頭として過重労働の防止や勤務時間の削減に率先して取り組むことの重要性について話し合った。地域により、実態は様々だったが、素晴らしい2つの提言をもとにして、活発で充実した、楽しい話し合いが持てたことが何よりであった。

「教職員の専門性に関する課題」

津市立八ッ山小学校 権 部 直 孝



ユアーズホテルフクイで行われた「教職員の専門性に関する課題」を話し合う第5分科会に参加した。

1つめの提言は、愛知県安城市小中学校教頭会の「進んで資質向上に取り組む教職員を目指して」というテーマでの実践報告であった。

研究の方法としては、「自己評価シート」を活用した資質向上を目指す取り組みと、教頭の関わり方に関する研究であった。「自己評価シート」の活用に関しては、3人の教諭の実践を事例として、その教師への支援を行う中、どのような成果が見られたのかの具体的な説明であった。例えば、学習指導を重点努力項目に置いた教諭に対して、継続的に授業の事前・事後の面談や指導案の検討、授業後の反省などを教頭と一緒にするという取組があり、その結果、生徒のその授業に対する「わかった」という評価がどのクラスでも向上したというものであった。

グループ討議では、各県における教職員育成の現状が交流された。その中で出てきた課題は、若手職員や講師の力量の向上に関するものであった。そして、それを解決していくためには、チームを作ったの取り組みや、ミドルリーダーの育

成など、各職場での教頭の工夫が重要であるということであった。

2つめの提言は、福井県三方郡教頭会の「教職員の資質・能力の向上を図るための教頭の役割」というテーマでの実践報告であった。

研究の方法としては、各校の地域の特色を生かしながら、教頭の役割を工夫していくというものであった。研究は、職員へのアンケート調査を行い、それを分析することから出発した。

実践内容としては御浜町の歴史ある人権教育の中で、教頭が中心的役割を果たしながら実践を進めているという事。エネルギー環境教育推進委員会の中で、教頭が推進委員として牽引し、実践を進めている、ということなどであった。また、研修体制の充実のために、教職大学院との共同研究やワークショップ型授業研修に、教頭が深く関わって実践を進めているという事例も紹介された。

グループ討議では、各県・地域の研修体制について、情報交換された。いずれの場合においても、教頭の役割が重要であることが確認された。

最後に助言者から、教頭としてビジョンを持って学校を支えるために、教育への情熱を持続



け、真剣に向き合うことで、教頭自身も成長していかなければならないことをご教示いただきたい

た。

第6分科会

「副校長・教頭の職務に関する課題」

度会町立度会小学校 岩 田 てるよ

危機管理と人材育成について教頭として何が
できるか、何をすべきかという点で、多くの学
びを得ることができた分科会だった。

提言1は、本巣市・北方町小中学校教頭会に
よる「学校の危機管理における教頭の職務と役
割～防災教育・防災管理・災害安全に関する組
織的な活動の充実を通して～」だった。豪雨に
よる土砂災害が想定される校区の具体的な取組
が報告され、児童生徒自身が自らの命や周囲の
命を守り、地域での安全確保に動ける子どもた
ちを育てることの必要性を痛感した。

防災管理体制づくりや、地域や保護者と危機
管理のための連携を、教頭としてどのように推
進していくか、また防災教育推進のための職員
研修の在り方や、地域ぐるみの避難訓練を考え
ていく上で、大きな示唆をいただいた。

提言に基づいてグループ討議が活発に行われ、
東海北陸各県の実践について情報交換ができた。
地震や津波、風水害や火山活動等、この数年間
に起きた災害はかつてない深刻な被害をもたら
し、いつどの地域で起こってもおかしくないとい
う危機感がある。災害から何を学び、防災教育
でどう伝えるか、どのような防災訓練が有効か
等、今後の実践に活かせる示唆をたくさんいた
だいた。地域の実情に応じた対応や想定すべ
き災害について、常に最悪の事態を想定してリー
ダーシップをとることができるよう、職務内容
の整理をしていきたい。

提言2は、鯖江市小中学校教頭会による「人材
育成を図り、学校組織を活性化するための教頭
の役割～OJTの工夫と教員の育成～」だった。

現在の職員構成の人数比は、全国的な傾向と
して、40代後半以降と20代～30代前半が最も多
いというアンバランスな状態が続いている。そ
のような現状の中で、教頭としてどのような職
場づくりをすべきか、改めて職責を自覚すると
ともに、日々の実践をふり返る良い機会となっ
た。経験の伝達だけでなく互いの力量を高める
ための有用なOJTについて報告がなされ、職
員育成のための具体的なアドバイスをいただく
ことができた。

グループ討議でも活発な実践交流が行われ、
授業力や学級経営力の向上のための交流や、時
宜にかなった話材に焦点を絞って15分・30分とO
JTの時間をこまめに確保していく方法等、各
校の多様な実践を知ることができた。本校でも
活用できそうな具体例が多く、職員間をつなぎ
ながら自分自身の向上に努めていきたい。



第36回

三重県公立小中学校教頭会研究大会 (鳥羽大会)

■第1－①分科会

教育課程に関する課題

「特色ある学校づくりの推進における教頭の役割について」に参加して

伊勢市立進修小学校 菅

基

平成26年11月29日（土）に「第36回三重県公立小中学校教頭会研究大会鳥羽大会」に参加させていただいた。私にとって初めての県の教頭会研究大会、少し緊張しながら長い坂道を歩き、会場である鳥羽東中学校に着いた。

第1－①分科会「教育課程に関する課題」は、始めに伊賀市立島ヶ原小学校吹上教頭より「特色ある学校づくりの推進における教頭の役割について」と題して、提言があった。伊賀市では、小中全35校に各校の学校づくりの内容や教頭の役割についてアンケートをとった。その結果、各校とも地域性を生かし、地域と密接に関わり合った教育活動が行われていることが分かった。そんな中、教頭の役割は、実に多種多様で地域と連携した学校づくりには欠かせない存在であることも明らかになった。学校が地域に発信や貢献をすることによって、地域からも支援が受けられ、地域に根ざした信頼される学校づくりが可能になる。以上のような内容であった。

次に提言者の学校について「小中同一校舎の島ヶ原小学校は、9年間を見通した教育ができるので中一ギャップも殆ど見られない。」「小中合同で行事や研修会を持っている。」「小中学校統合連携推進協議会へ地域住民も参加して、小中が一体化できている。」など、地域力を生かしたり、教育活動を巧みに地域に位置づけたり

した取組が報告された。

＜グループ討議＞

①特色ある学校づくりの推進における教頭の役割

県内各地からの参加者が、それぞれの地域と関わりながらどのように日々の実践を積み重ねているか話し合った。「教育財産を積み上げ、連絡・調整を担うのも教頭の大切な役割であろう」ということで皆の意見が一致した。

②特色ある学校づくりを担う教職員の育成

「ミドルリーダーや若手の育成が肝心である。」「ベテランの指導のマンネリ化を解消するには、新しいことへの挑戦を促すこと」「共に歩む（教頭が）姿勢が大事」など、貴重な意見が出された。

③地域との連携を大切にした取組の推進について



「土曜授業を活用した地域との連携」「地域で適切な人材を発掘し、教育活動に参加してもらうことも有効な連携である」など、いくつかの実践が報告された。

グループ討議の後、各グループの代表者からそれぞれの討議内容の発表が行われた。

最後に助言者からいただいた「教頭は多忙である。常に『この仕事は何のためにするのか』と問いかけること（大抵が子どものためである）で納得して取り組むことができる。」という言葉が印象的であった。



■第2－②分科会

子どもの発達に関する課題

不登校児童生徒への支援と改善に向けての体制づくりと教頭のかかわり

志摩市立志島小学校教頭 向 井 正 明

11月29日（土）、平成26年度第36回三重県公立教頭会研究大会に参加させていただきました。あいにくの天気でしたが、雨に洗われた鳥羽の山々の鮮やかな紅葉が目飛び込んできて、研究大会への期待が高まりました。

第2分科会②部会では四日市市立内部中学校川村隆夫教頭先生から「不登校児童生徒への支援と改善に向けての体制づくりと教頭のかかわり」について提言発表していただきました。

四日市市は3つのブロック会議を中心に取り組みの協議をしており、協議の柱は(1)不登校を出さないための取組(2)不登校児童生徒に関する取組でした。

(1)の不登校を出さない取組では、特に中1ギャップの解消に小中連絡会を活用し、校内では、欠席3日目シートの利用を通して、不登校へのきっかけをつかみ、早期対応に効果があると感じました。(2)不登校児童生徒に関する取組では、関係機関との連携の大切さや校内不登校対策委員会の設置、小中学生指導の連携、学習規律の指導の共有などが紹介されました。

内部中学校や四日市市の取り組みを紹介していただき、これからやるべきことの示唆をいただきました。さらに人数の多い学校できめ細かい取組がされていることは、小規模校でももっとできることがあると感じました。

グループ討議では幼小中の連携の大切さ、特に人権教育に視点を当てた取組が、不登校児童生徒の支援に必要であることを中心に話し合いました。家庭環境の厳しさがそのまま教育環境の厳しさにつながっていくことなど、家庭へのアプローチが必要であることも確認しました。

中1ギャップを取り除く取組は多種多様に各地・各校で行われていますが、ギャップを越えて成長していくたくましさを見出し求めていくことも大切ではないか、という意見があり、指導のバランスが大切だと思いました。

助言者からは人間関係づくりを中心とした予防的・開発的生徒指導のアプローチが有効であり、原因を探りそれらを取り除くことから、不登校から脱却し、それに向けて行動していく活動が必要で、将来を見越した指導をしていくこ



とが大切であることをはじめ、たくさん参考になる助言をいただきました。

今回第2分科会に参加させていただきましたが、教頭として職務を遂行する上で、大切なことがどの分科会でも共通した課題があると思いました。そして県下で奮闘している先生方の姿に勇気をいただきました。

事前に周到な準備のために時間を割いていただいた鳥羽市の教頭先生の温かなおもてなしを感じ、学生時代の友人や、新採当時にお世話になった方々との再会で、同窓会に参加したような感覚もあり、帰りに上がった雨雲から届く夕方の光芒が、月曜日からの仕事への意欲をわき上がらせてくれているような気がしました。ありがとうございました。

■第3分科会

教育環境整備に関する課題

「地域の教育力を生かした特色ある学校づくり」

多気町松阪市学校組合立多気中学校 三 石 幸 宏

11月29日（土）に鳥羽市立鳥羽東中学校で行われた研究大会の第3①分科会に参加させていただきました。

津市立一身田中学校の横山徳浩教頭先生より「地域の教育力を生かした特色ある学校づくり」という主題で提言がなされた。一身田中学校区内には三重大学や三重短期大学などの教育機関、三重県総合文化センターや三重県人権センターなどの公共施設がある。三重大学との連携活動は9年目に入り、学校地域支援本部「サポーターいっちゃん」も7年目に入ったという。あわせて古くから伝わる地域行事も盛んだということである。

このような環境の中で、学校が大学や地域と連携し、子どもたちの学習や活動を支援する取組が続けられている。津市では一身田中学校の他にも学校支援地域本部やコミュニティ・スクールを設置している学校や大学連携校があるとのことである。

一身田中学校という学校名からまず初めに自分の中で想起されたのは「制服の自由化を県内でいち早く取り入れた」ということである。

制服の自由化を取り入れてから早や17年目を迎えるという。そしてさらにお茶・水のみに限定した自動販売機を学校に設置しているという。これは熱中症対策も考慮に入れてのことであろうが、売り上げ金については学校(生徒会)に還元しているというこの取組は斬新であると思う。

また着目すべきは過去に文部科学省から指定を受けたことを一つのきっかけとして始まった一身田中学校の「学校支援地域本部事業」の取組が指定の期限が切れても継続され、今なおその広がりを見せ、進化し続けているということである。助言者である県教育委員会小中学校教育課指導主事の脇本恵生先生の言葉をかりれば「一身田中学校におけるサポーターいっちゃん」の取組は地域教育力向上支援、キャリア教育向上支援、生徒会活動支援、学習環境整備事業等

の柱があり、それぞれの子どものためになるしっかりした取組ですばらしい。」まさにその通りであると思う。

「特色ある学校づくり」または「地域に開かれた学校づくり」と言われて久しい。いわゆるコミュニティ・スクールは「地域に開かれた特色ある学校づくり」を実現するための格好の手段であると一身田中の取組を聴いて感じた。前述の助言者である脇本先生はコミュニティ・スクールについても以下のように言及している。「コミュニティ・スクールはツールである。組織や形を作るのが目的ではない。この取組は大人の生きがいづくりに貢献するとともに地域の教育力の向上に寄与している。また、即効性のあるものでなく、漢方薬のようなもの。学校が真ん中でなく、子どもを真ん中に据えて学校、地域、大人がみんなで地道に取り組み、地域を愛する心を育むことが大切である。」

一身田中学校からの提言後に、「特色ある学校づくりの各校の現状について」と「教頭として特色ある学校づくりにどのように取り組んでいるか」の2つの討議の柱に基づいて5つのグ

ループに分かれてグループ討議が行われた。私が所属したグループには熊野市、員弁郡、そして三重郡の小学校に勤務する教頭先生方がいた。自己紹介を兼ねながら各学校の概要や取組の様子を交流している内に話し合いが盛り上がり、教頭としてのあり方や働きにまで話が及びグループ討議はあっという間に終了した。各グループからは「教頭の役割は連携の要であり、パイプ役。地域の情報を知っておく必要がある。」「どのようなねらいで人材活用をしていくかが大切。」「学力向上につながる地域支援をどのように考えていくかが課題。」などの意見が出された。

同じ思いや悩みを共有できたと実感できる充実したグループ討議であった。

教頭職は、ともすれば忙しさにかまけ、袋小路に迷い込んでしまいがちになる日常の連続であるが、この分科会を通じて良い意味での刺激をいただき、一筋の光明というか活路が見いだせたような清々しい気持ちで帰路につくことができた。

この場を与えていただいた関係者の皆様に感謝の意を捧げて結びの言葉としたい。

■第4－①分科会

組織・運営に関する課題

「教職員の総勤務時間縮減に向けた教頭の役割」に参加して

名張市立桔梗が丘南小学校 勝村元彦

第36回三重県公立小中学校教頭会研究大会で、私は、第4分科会の①グループに参加した。

始めに、提言者の四日市市立川島小学校 染井桂子先生から、「教職員の総勤務時間縮減に向けた教頭の役割」という主題での提言をうかがった。まず、この主題を設定した理由として、学校現場では、子どもたちの健やかな成長をめざし、教職員が大きな使命感と責任感のもと、日々の教材研究や文書作成、保護者対応に懸命に努力している。これは、学校現場の多忙

化・長時間に及ぶ勤務時間外勤務と密接な関係があり、教職員の健康が脅かされる状況になっている。教職員の健康を守ることは、健全な学校教育を推進する上で、不可欠であり、そのため教頭の役割について各校の具体策を交流しつつ、学校運営の見直しを図っていききたいと述べられた。

研究の内容としては、平成24年度に「教職員の総勤務時間縮減に向けた教頭の役割」について、アンケート調査による勤務実態及び取組状

況の把握をおこなった。それをふまえ、平成25年度には、各校の実態に応じた実践をおこない、教職員の意識改革に取り組んだとのことであった。その中身は、○学校運営の見直しとして、①会議の精選 ②校務分掌の工夫 ③学校行事の見直し ④職場環境整備 ○教職員の意識改革として、①勤務実態の意識化 ②定時退校日の設定 ③メリハリのある職務執行 ○支え合い・助け合う職場づくりでは ①休暇の取得推進 ②管理職によるサポート であった。

成果と課題として、染井先生は、総勤務時間縮減の取組は、心身の健康増進とともに、公務能率の向上にも寄与すると述べられた。また、主題に取り組む中で見えてきた課題として、学校組織づくりをあげられている。初期対応のまですから、事態収拾までに延々と時間を要すると、いくら上記のような取組をおこなっていても教職員の疲れはとれないからである。そのため、日頃から子どもや保護者との良い関係作りが、本課題解決のためには不可欠であると結論づけられた。

そのあとグループ討議にうつった。わたしは

Bグループに参加した。各校の実態を交流していったが、学校規模によっても様々な実態があり、一律の解決策はないが、若い先生方が、情報交換や不慣れな事務のため残るとするのは、自分たちも経験があるのでわかるが、学校も社会の一員であり、一般企業と同じように、光熱費の節減についての意識も持たなければならないという意見も出た。

次に、助言者の鳥羽市立鳥羽小学校長の柴原豊彦先生から、組織作りに関係して、「組織能力の強化について」と題したお話をうかがった。

最後に、お世話になった運営委員の山田喜久先生よりごあいさつがあり、分科会は終了した。



■第5－②分科会

教職員の専門性に関する課題

「学力向上に向けての小中連携」に参加して

鈴鹿市立一ノ宮小学校 米 川 寿 美

大会会場への道すがら、見事な紅葉に日頃のあわただしさを忘れて向かった鳥羽市の会場。「少数での運営」とうかがったが、行き届いた進行に実務における市内連携の良さを感じた。

第5－②分科会ではまず、鳥羽市立安楽島小学校、嶋谷教頭先生から、学力向上・中1ギャップの克服などに関する1中学校・5小学校における具体的な取組と教頭の役割について発表があった。



(1) 校区懇談と出前授業

小学校の外国語活動に中学校の英語教員が出向いたり、中学校で、小中の教員が合同で授業をしたりすることで、特に、小6の中学校英語への不安感を和らげる点で効果があるとのこと。

(2) 小中1対1の連携

9年間の系統性を軸に、C R Tを全市で実施し、結果を小中で交流して、「めあて」「ふり返り」カードを授業で共通活用している。また、小中合同の研究主題を設定して授業研究を進めて、小学校で身につけたことを中学校で徹底できるように、足並みをそろえた実践に取り組んでいる。

鳥羽市教頭会では、都市部や離島など、それぞれに特色ある校区の事情を理解しあった上で、連絡調整等の中心となって連携を推進され、学力向上や人材育成へのより効果的な取組を目指すと共に、細やかな情報交換によって、個々の児童への対応についての成果が得られていることが報告された。

グループ討議では、学校規模や地域性に応じた取組などについて話し合われたが、小中相互の出前授業、研修テーマの共有、児童生徒の情報交換など共通する取り組みも多く、9年間を見通した教育活動の効果と必然性を感じた。とりわけ統合を見通したいなべ市の取組は興味深く、月に1度ずつ中学校区の教頭会を実施していること、子どもや保護者向けの学習の手引きについて、小学校と中学校の分を一つにまとめ

て配布していること、算数と数学で連携した授業作りを行っていること、ネット上において、言えば教頭職共同実施のような取組があること、研究授業のテーマやねらいについて教頭間で調整を行うこともあるなど、仕組みや実用性の点でも先進的取組と感じられた。この研究大会にも、いなべの教頭先生方は中学校区ごとの配車で来られたとのこと、車中での時間も校区交流に有効活用される徹底ぶりだった。

各グループの討議内容については、小中の授業者交流と、Q Uや生活チェックシートの実施と結果についての情報交換を上げたところが多く、特に中から小、小から中への授業交流は県下のほとんどの学校で行われているようだった。

最後に助言者の鳥羽東中学校、小竹 篤校長先生から今後の重要課題3点についてお話しいただいた。まず1点目は英語教育。他府県の例として、同じ中学校区の小学校で外国語教育の授業内容をそろえて、中学校につなぐ試み。2点目に道德教育。言語活動における連携として、話法の活用など言葉の使い方指導に小中で取り組む事例。3点目に正に「小中連携」。統合や校区の再編、時事に沿った教育的ニーズの把握など、環境の変化に対応できる小中連携が求められており、今後、教頭先生は、事務・調整に徹するのではなく、校長先生と大いに議論し、現場の最前線に身を置くものとしてむしろ中心的に提案をしていってほしいと結ばれた。

■第6分科会－②

副校長・教頭の職務に関する課題

「防災における教頭の職務と役割について」に参加して

三重郡菰野町立菰野小学校 内 田 信 司

平成26年11月29日（土）に「第36回三重県公立小中学校教頭会研究大会鳥羽大会が開催されました。自分にとっては久しぶりの鳥羽。雨模

様の天気ながら、車から見える景色は、まさしく紅葉真っ盛り。「こんなときに・・・」という思いを抑えながら、鳥羽へと向かいました。

私は、第6分科会②に参加させていただき、多気郡教頭会の西出宮川中学校教頭先生からの提言をもとに、防災における教頭の職務と役割について考え、学ぶことができました。

多気郡は、山側の多気町・大台町と海側の明和町からなり、同じ郡内に山側と海側の学校が存在する点では、私が勤務する三重郡と似た環境にあります。つまり「防災」と一言と言っても、山側の学校では河川氾濫や土砂災害、海側の学校では津波被害と想定する災害も違ってきます。そんな違いのある中で多気郡教頭会として、郡内の各校の防災の現状の把握と交流を手始めに、各校の防災上の最重要課題への対応や各校の「防災マニュアル」等の見直し及び充実に向けての取り組み、そして、教職員や家庭・地域への教頭としての関わり方について研究されたことを提言していただきました。私は、その提言の中で、校区内を自分の足でくまなく歩き、危険な場所や津波が来た時に避難できる場所や避難経路を確認し、時には地域の方に協力をお願いしながら防災に取り組んでみえる大淀小学校の千原教頭先生の話に興味深く聞かせていただきました。そのアクティブな取り組みに、自分の欠けているところが見えたようで、とても刺激を受けました。

後半のグループ討議では、①各校の児童生徒に対する防災教育についての工夫の交流と課題について②教職員の防災意識を高める手立てについて③防災における家庭、関係機関、地域に対しての教頭の職務と役割についての3つの柱で、意見交換を行いました。私のグループには、全校児童生徒が100人に満たない小規模校から900人を超える児童生徒が在籍する大規模校まで、バラエティーに富んだ構成でしたので、大・中・小規模校それぞれの特色ある取り組みや課題等について意見交換をすることができ、内容の濃い討議になりました。「避難訓練」や「下校訓練」「安全計画」などを話題の中心として意見交換をしましたが、小規模校では、担当教諭が計画立案するのではなく、教頭先生がされていることや地域に密着した訓練の様子などを

聞かせていただき、大規模校に勤める私には興味深いことも多く、それぞれの学校事情により教頭の職務や役割も違ってくるのだと改めて感じました。そして、それぞれの学校で頑張ってみえる教頭先生方の姿や熱心な話し合いに元気をもらいました。この分科会の討議から、「防災」に対する自分自身の考え方や取り組みについて、再度考えることができ、とても充実した時間になりました。

「紅葉真っ盛りのこんなときに・・・」という思いを抑えながらの一日の始まりでしたが、とても有意義な一日になりました。準備、運営をしていただいた三重県教頭会役員・鳥羽市教頭会・志摩市教頭会の先生方、ありがとうございました。



まさに、伝説（レジェンド）の島

鳥羽市立神島小学校 掛 橋 敏 也

教頭として神島に赴任して8か月。新米教頭で、学校長・職員はもとより地域の方々みんなに迷惑を掛けながらも何とかやっていくことができている（と思っているのだが）のも、この島のおかげだと思っている。元気で素朴な子どもたち、温かい目で見守ってくれる人情豊かな島の人たち、調理員さんやまかないさんが作ってくれるおいしい食事、教職員住宅は何とキッチンバストイレ付き、おまけにベランダまである。そのベランダからは見渡すかぎりのオーシャンビュー。冬場はもれなく無料で楽しめるジェットコースター（感覚の定期船）と、まあ数え上げれば、こんなにすばらしいことが満載された島なのである。寮から学校までは歩いて15分弱である。ほぼ1kmの道のりで、朝晩ウォーキングして行き来するから、きっと健康的で、たるみきったメタボリック体型からも脱出必至！と思いきや、デスクワークへの転換とおいしい給食と寮の食事をつい食べ過ぎ、朝夕のウォーキングを上回るカロリー摂取により、痩せるどころか逆に3～4kg体重が増加してしまった。これから、4月から島で経験したことの中で驚かされたことについて報告させていただく。

（１）ミミズがおっきい！

ミミズがことのほか大きい！神島に赴任する前に研究発表会で来たときにも思ったことだが、ミミズが本当に太くて長い。これは神島の土が異常なほど栄養豊かなのか？天敵がいないのか？どうかはわからない。とにかく一見の価値あり！

（２）カタツムリがいっぱい

雨が降ると、どこからともなく大量のカタツムリが出没する。朝はいいのだが、夜道を歩いているときは要注意。できるだけ踏まないように歩いても何度かは聞きたくない音を聞いてしまう。あんなにたくさんいるのに、どうして名物にならないんだろう？

（３）ゲジゲジがちがう！

ゲジゲジと言えば、風呂場など湿気の多いところなどで見かける長い足がたくさんある虫を思い浮かべると思う。ところが…。神島のゲジゲジはかなり違う。足が多いのは同じだが、真っ黒で足が短い虫なのだ。

（４）蜘蛛の巣が多い！

朝、海を眺めながら快適に歩いていると、不意に襲われるのが、蜘蛛の巣である。道の真ん中でもその攻撃を顔面に受けることがある。朝一番に学校へ向かう中学校の教頭先生は、露払いならぬ蜘蛛の巣払いの杖（！）を持って学校へ向かう。

（５）限界？の車

赴任してすぐに学校の自転車がパンク、さらに、公用車までがパンクするという事態に。自転車は直せても、さすがに車のパンクは直せない。試しに、自転車の空気入れで空気を入れてみると、なんと、空気が入ったのである。夏休み中の車検後一月も経たないうちに、昨年壊れたスライドドアが再び壊れ、自動スライドドアに。このドア、走行中に自然に開閉するので恐るべしである。そのため郵便物が落下する事態まで。（お客さんは無事）この前、ようやく直してもらったが、さすがにこの車は海外での再使用も不可能だと思われる。

ほかにも伝説はたくさんあるみたいです。何はともあれ、一回ぜひ来てもらいたいところです。



＝地域、生徒と共に学ぶ防災学習＝

紀北町立潮南中学校 川 端 裕 也

本校の運動場の海拔は約2 m、学校玄関付近でさえ約3 m、校区の各地区は海に面しています。そのためか地震・津波に対する関心は高いと言えます。東日本大震災までは校舎の4階を避難場所としていましたが、震災後は校舎を離れ、距離はあるがより高いところまで逃げることを選択しました。

そんな中で、新たな防災学習がスタートしました。避難訓練にも一生懸命に行動する生徒たち。そして訓練後に聴き取れる声も素直です。避難行動に欠かせないとして変更となった、上履きのシューズ化もその生徒たちの声が力となりました。

必要な知識や意識を高めるための授業を、行政はもちろん各区長や自主防災会等各方面からの指導や助言も得ながら試行錯誤の中で重ねてきています。タウンウォッチングなど防災に関する校外活動の諸場面をはじめ、校内の授業でもゲストティーチャーとして協力をいただけてきました。

一方学校は、立地する区の防災訓練に同区の小学校と共に生徒全員が参加し、住民の一員として

の意識を高めたり、避難時や避難場所等の課題を浮き彫りにして区の次の取組に反映することに寄与してきました。また、地区の避難場所を整備する活動をカリキュラムに組み入れたり、生徒会が中心となり地区の会館の窓ガラスに飛散防止フィルムを貼る活動を行ったり、地域貢献の活動も続けています。

震災に限らず、遺された人々がよく言う言葉に「あんなことが起こるのが分かっていたら・・・」があります。いつ起こるか分からない天災に対して「分かっていたら」はありません。それだけに、今を大切に生きること、自分自身と周囲の人たちの命を大切にすることが、よりクローズアップされてきます。生徒たちには「明日死ぬかも知れない」というネガティブな方向ではなく、避難訓練や救命法などの具体的な取り組みに積極的に参加しています。教頭として、より良い未来を想像する力、またそのために今の自分が精一杯生きる力を育み、地域とのつながりを深め、将来の地域のリーダーとして育ててほしいと願っています。



